

授業者に訊く ①

今回の2つの「授業者に訊く」では、大学の先生に「聞き手」をお願いしています。本誌エッセイ「風の音…」を執筆されている前田美子先生と一緒に、神戸市で最も東端に位置する東灘区にある住吉小学校を訪れました。5年生による『つばさをだいて』を教材にした授業です。「ハモリの鉄則」というポイントを意識しながら、子どもたちはのびのびと歌っていました。

授業者：室屋尚子

神戸市立住吉小学校

本時の授業の位置付け

今回の授業の題材は「気持ちを歌にのせて表現しよう」です。歌詞の内容や旋律の特徴を把握することによって、歌のイメージを広げ、歌への思いを確かにするとともに、楽曲にふさわしい発声や表現を工夫し、二部合唱を楽しむことをねらいとしています。

指導計画は全5時間、本時はその第3時に当たります。子どもたちがお互いの歌声に耳を傾け、声の重なりや響き合いを自分なりに感じ取ることで、合唱のハーモニーづくりへとつなげていきます。

ハモリの鉄則

これができるばおぬしもハモれる。

その一、音程

正しい音程を身につけねばならぬ。

その二、音色

かたい声やカスカスの声と
柔らかい声では合わぬ。響きも肝心。

その三、バランス

他のパートを良く聴いて比べ、大きすぎず
小さすぎず、ほどよいバランスが肝心。

その四、表情

明るい顔と暗い顔では合わぬ。
顔と声はイコールなのだ。

その五、心

ハモりたいと願うこと。
友達との心のつながりが大切なのだ。

授業の流れ

	学習活動	確認事項や留意点(・)評価(☆)
導入	1. 『あきらめないで自分を』を歌いながら踊る。 ・リズムにのってのびのびと歌う。	・心を解放し、元気よく歌える雰囲気を作るようにする。
展開	2. 『つばさをだいて』のパート練習をする。 ・同じパート同士で二重の円になり、交互に歌い、アドヴァイスする。アドヴァイスを生かして一緒に歌った後、外円の人が一人分ずつ移動し、同様の活動を繰り返す。 3. 『つばさをだいて』の二部合唱をする。 ・教師との二重唱をする。 ・グループで“ハモリの鉄則”を確認しながら練習する。 ・音程や息つきなどに気をつけながら、自然で無理のない声で歌うようにする。 ・グループごとに二部合唱を発表し、聴き手は感想やアドヴァイスを伝える。	・音程や息つきなどに気をつけながら、自然で無理のない声で歌うようにする。 ・相手の声をよく聴き、アドヴァイスする。 ☆友達の演奏を聴いて、そのよさを感じ取り、自分の表現に生かしている。 【学習場面の観察】 ・“ハモリの鉄則”を提示する。 1.音程 2.音色 3.バランス 4.表情 5.心 ・響き合いの美しさを感じ取る。 ・うまく歌えない児童には、教師が耳元で歌うなどして支援する。 ・発表者は、自分たちの課題を聴く側に伝えてから発表する。 ・聴き手が、適切なアドヴァイスをするようにうながす。 ☆声の重なりや響きの美しさに関心。をもち、表現したり、聴いたりすることを楽しんでいる。 【グループ学習の聴取・観察】
まとめ	4. クラス全体で二部合唱をする。 ・クラス全体のハーモニーを楽しみながら二部合唱をする。	・全体の響きを聴き、楽しんで歌うよう声をかける。

思いを歌声にのせて

聞き手
前田美子
(東京女子体育大学)

子どもとの距離を大切に

前田 授業の導入で踊ることによって、明るい雰囲気になりますね。

室屋 歌で表現すること、言葉で表現することとともに、身体で表現することも大切だと思っていますので、心を解放してのびのびと踊る活動を授業の中に取り入れるようにしています。

前田 発声と歌と身体表現とが結びつくようにしていくと、動いても声は安定して出やすくなりますね。先生も授業でやっていた踊りは踊れるのでしょ

う！

室屋 踊れません(笑)。

前田 子どもたちはとても上手に踊っていましたね。

室屋 すぐ覚えてしまうという、子どものあの感覚には、いつも感心させられます。

前田 オルガンに合わせてぱっとできていましたね。今日はなぜピアノではなくオルガンを弾いていたのですか？

室屋 ピアノのほうへ行くと、子どもの表情が見えにくかったり、声が届いてこなかったりするのです。仕上げの

ときにはピアノで伴奏を弾くようにしているのですが、音を取ったり、表情を見たりという最初の段階では、子どもの顔が見やすいところでと思ってオルガンを弾いています。

何回も歌う

前田 今日の授業では、「全員」「グループ」「グループの一部」、というふうは何回も歌っていました。人数を減らして歌ったのはどうしてですか？

室屋 授業では、必ず1時間の中に1人で歌う、少人数のグループで歌う、全員で歌う、という部分のどれかが入るように組み合わせをしたいのです。大勢の中だと、自分が紛れてしまって、ちょっとくらい歌わなくても周りの人が助けてくれるとか、自分ができるという気持ちになってしまう場合があるので、少人数のグループで聴き合う場面や、1人で歌う場面も必ず授業の中に入れるようにしています。

前田 二重円の外の人が歌って、中の人が聴いている、それも一対一で。それで、外が一つ動く違う人が来る。「なんだおまえかよ」と言いながらもまじめにやっていたね。グループ練習のときも、あとで発表するというのがあるので、自分たちで一生懸命やっていました。合計何回歌ったんでしょうね？

室屋 何回でしょうね(笑)。



声を聴き合う

前田 授業の途中で、重々しく巻き紙を広げながら“ハモリの鉄則”を提示していました(笑)。「音程・バランス・表情」ということを考えたのはなぜですか？

室屋 「うまく響き合わないのはどこなのか」というポイントがはっきりすればと思って。心は合わせようとしているけれど、音程が悪いとか、バランスがよくないとか、できている部分とそうではない部分がわかれば、取り組みやすくなると思うからです。「表情・心」など、鉄則の中には音楽が苦手でも達成できる内容を意図的にポイントとしています。

前田 先生がオルガンを弾かなくても、自分たちで音取りをしていましたね。わたしが見ていたグループも、互いのパートをきちんと聴き合って、ア・カペラで全部練習していましたね。それがすてきだと思いました。

室屋 子どもが「キーボードを使ってよいか」と聞いてきたときには、使わせません。木琴で始めの音を取っているグループもありますが、いつの間にそうなったのかわかりませんが声だけで合わせていることが多いですね。

前田 互いに聴き合うという意識があるんですね。それは、両方のパートを把握しているからでしょう。授業の中で子どもが「どっちのパートが主役か脇役か」と言っていました。そこに気がつくという感覚がよく育っていま



すね。積み重ねた実践もあるのでしょうか。

室屋 聴くということが一番大事だと思うので、低学年のうち、わたしが良い例と悪い例を歌って、どこが良くどこが悪いのかを比べたり、友だちの歌を聴いて、いいところとアドバイスをするとを教える、といった活動をしたりします。

グループでの練習について

前田 グループで活動させている先生方は多いと思いますが、どのような点に注意していますか？

室屋 グループの中で高め合えるようなこと、たとえば、“ハモリの鉄則”という課題のようなものを、きちんと意識して活動をすることが大事だと考

えています。グループに分かれたときに、ただのグループ遊びにならないように、全体の授業やそれまでの活動の中で、高め合おうという思いをもたせておくことも大切だと思います。

前田 何年生からこのように実践しているのですか？

室屋 3年生のリコーダーくらいからです。

前田 それはこの教室だけを使っているのですか？

室屋 はい。

前田 学校によっては、廊下や隣の教室に分かれて活動しますね。たとえば、ソプラノ・パート、アルト・パートに分かれて、別々の場所で練習してそれで合わせようとするのですが、わたしはそれを少し疑問に思っています。室



●むろや・なおこ
神戸市立住吉小学校教諭

屋先生はどう感じていますか？

室屋 「わたしはソプラノ・パートだから、アルトのことは知りません」というように、自分のパートだけを練習

して合わせても、それはただ上と下のパートが重なっているだけで、ハモる、響き合うということはできていません。相手の声や相手がどんなふうに乗っているかを聴かずに、自分の中だけで歌っているという活動になってしまいます。いつでも、周りの友達はどんなふうに乗っているのかなということも気にしながら、自分の声を聴いて歌うということが大事なのではないかと思うのです。

歌う曲数が子どもを育てる

前田 先生は教えている曲数が多いのですね。歌い込んでいる曲数が多い子どもは、音楽の流れを自然とつかむんですね。初めて聴いた曲でも、あの歌と似ているとか、すぐに見破ってしまったりします。それに、ほとんどの子どもがアルト・パートを歌いたいと言っていましたね。

室屋 みんなアルト・パートが好きなんです。アルトを自分が歌っているところに、ソプラノが乗ってくるのが気持ちいいと思っているんです。わたしもどちらかというとアルトを歌うのが好きです。前田先生がおっしゃったように、子どもはだいたい次はこうなるという曲の流れの予想がつくようです。まだやっていないところでも、雰囲気次第で次の音を想像して歌ってしまいます。

前田 歌う回数も多く、曲数を多くこなしている子どもは自然にハモれます。頭で教わるのではなく、身体で教わると伸びが速い。身体を使って子どもに教えると、子どもは一生の宝にしてくれます。

子どもの側に入っていく

前田 今日の授業で特に感心したのは、先生が子ども一人一人に目をかけていた点です。「先生と二人で歌う最初の人」として当てられた子どもが、初めは乗り気でなかったのに、先生の目とお見合いをしたら歌いましたよね。あの何秒間が、子どもを動かしました。口では笑いながら、目で子どもを動かしてしまう。これはすごいと思います。別な場面では、発言に消極的な子どもに、やさしくもきっぱりと「考えておいてね」と言葉をかけました。いつも子どもとの距離を考えて、子どものやる気を出させていることが大きいですね。だからこそ、子どもたちから「わたし





ることで、歌は上手に歌えないけれど踊れると思えたり、歌いながら踊ることで、自分の気持ちが解放されたり、ここで失敗しても大丈夫なんだということが、みんなの中でわかってきたら次に進むための一歩になるのではないか、と思っています。前田 わたしが音楽の授業について思うのは、何よりも音楽室が好き



●まえだ・よしこ
東京女子体育大学講師
むさしのジュニア合唱団「風」指揮者

東京都葛飾区立南奥戸小学校を振り出しに、板橋区、青梅市、武蔵野市の小学校で、子どもたちの歌う心をやさしく育ててきた。著書に『子どもと歩く』『レパトリーを広げる小学生の合唱（CD付楽譜集）』（いずれも音楽之友社）など。全日本合唱教育研究会理事。

はこういうふうに歌いたい」という思いが伝わってくるのだと思いました。室屋 子どもが参加しなければいけない、一緒に参加して楽しいという気持ちになるようにしなくてはいけないかと思っています。最近では自分をうまく表現できない子どもが多いと感じるのです。それに音楽が得意な子どももいるし、不得意な子どももいます。最初の『あきらめないで自分を』も、歌うだけでは歌が苦手な子どもは参加できなくなってしまうのです。踊りを付け

になることですよ。音楽室に入ったら気持ちが解放されて、身体が自然と「音楽モード」に入ってしまった。こうなったら、どんな音楽にでも“音楽する”と、とび込んでくるのです。この楽しさの中で、音楽を体感しながら、リズム、メロディー、バランス等、基本的な答えの出し方を教えるといいでしょう。算数の解答のように。音楽って、一番に整理整頓、数学的だと思うのです。

その上に、曲に命を吹き込む表現ができると思うのです。このとき、子どもらしい一言が、ポロポロと（詩人のように）生まれて、表現は高まるのです。そのポロポロの一言を引き出すのは、先生のなげない助言が大きいですよ。子どものシャープな感覚を信じてね。

室屋 子ども心の心の中に入っていき一言、これが言えるようになりたいです

ね。どういう言葉がけや動作をすれば、子どもの心に響くのかということをもっと学びたいと思っています。前田 「難しいことをやさしく、やさしいことを深く教えること」。これはある人の言葉なのですが、わたしはその「深く」から身体を通して子どもの中に入れば、子どもが自分から何かを求める子どもになると思います。考えない、動かない、すべてもらったもので解決するという子どもが増えていまずからね。



参観を終えて アシスト！サポート！シュート！！

前田美子

住吉小学校を訪ねると、いつも明るく弾む声が、とびこんでくる。

合唱部への訪問はありましたが、授業を見せていただいたのは、今回で2度目です。あれから10年余り経っています。

その間、室屋先生は転勤したり、コンクールに参加したり、地域のイベントに出演したりと、いろいろな活動にも参加しているとのこと。

10年経って、今もあの頃の歌声と変わらず、良く響く伸び伸びとした子どもらしい声でした。大きく違うことに気がついたのは、

“先生がいて、子どもたちがいる”から、

“子どもたちがいて、先生がいる”へと主役が変わっていたことです。

もちろん、子どもたちだけで授業は成り立つわけではありません。今まで以上に準備をし、工夫をしているのだと思います。一步も二歩も三歩も後ろに下がって、子ども一人ひとりに目を配り、心の中の小さなつばやきを聞いているのでしょう。

子どもたちが生き生きと活動をしています。何よりも感心したのは、ずっとこの日の授業は「聴き合う、聴く」ことが中心に展開されているのです。

歌うのが苦手、音楽の授業はいまいち…という消極派もいることでしょう。それを“失敗を気にしない、お互いさま”という安心が温かく授業を包んでいました。

先生と子ども（一対一）の重唱、子どもどうしの重唱、グループへ、全体へと輪を広げながら“大勢の中だと、自分が紛れてしまっ…”“自分はできているという勘違い…”を確かめ合い、細かなところまで、子どもたちが互いに聴き合い、楽しそうに円になった

り、友だちを代えたり、気がついたら、確かな音ができあがっていくのです。歌声が子どもたちの笑顔の中で響いていました。まさに先生はアシスト!!（音楽の）ボールをシュートしているのは、子どもたち。愉快愉快。

——もう一つ。

ときどき、いただく♪☆すみよし合唱部だより☆♪です。この筆まめの執筆者は、同校の松下秀市先生。

「そして、“一人が100万円の楽器でだめだったから、次は200万円の楽器になろう”とキャッチフレーズもできました！50人でたら200万円×50人で、1億円やでえ！住吉1億円合唱団にでもしましょうかア（笑）」
「200万円の楽器になる！がんばるでえー！」

これは、コンクールで、思わしくない結果への励まし文章です。

「保護者の皆様、6月の保護者会に集まって、リボンづくり、毎日のお弁当づくり、差し入れ…、大きなご支援、本当にありがとうございました。

最高の喜びをここにいるたくさんの方々と共有できるその幸せを、すべての方々に心から感謝したいです。本当にありがとうございました。」

子どもたちの歌声が好きだから、室屋先生の本物を求め、本気になるという考え方が好きだから——と、子ども、親、先生方との間のクッションになってくださっている「合唱部だより」なのです。

サポートするほうより、一口に言っても、シュートのほうがかっこいいかもしれません。でもでも、サポートには意味があるのです。

授業者に訊く ②

横浜市の北西部、都筑区にある中川小学校を訪ねました。
 小学校5年生が『シンコペーテッド クロック』を演奏し、2年生が鑑賞するという
 異学年交流による授業です。当日は保護者の参観もありました。
 『名曲探偵アマデウス』の監修でもおなじみの、野本由紀夫先生が鑑賞の実践に迫ります。

授業者：板橋典子

横浜市長中川小学校

本時の授業の位置付け

2年生の鑑賞曲を5年生が演奏する鑑賞会の形をとった授業で、教材は『シンコペーテッド クロック』です。

5年生は「曲想を生かした表現を工夫して演奏しよう」という主題でこの曲を学習してきました。2年生は「曲の楽しさに気づいて聴こう」という学習主題により2時間扱いで学習します。

前時で2年生はCDを鑑賞して、この曲を特徴づけている楽器の音色やリズムに気づきました。今回は5年生による演奏から、時計の音を表現している楽器の音色やリズムを視覚的にも鑑賞し、曲を聴きながら楽しんでリズムのまねができればと考えています。

5年生はこれまでの学習を生かして、A-B-A-C-Aの構成を理解し、A・B・Cそれぞれの雰囲気の違いを感じて演奏することを目指します。

授業の流れ

学習活動	主な指導内容	支援(・)と評価(☆)
○前の時間を振り返る。 ・『シンコペーテッド クロック』のCDを聴く。 「前に鑑賞したとき、気づいたことはなんだったかな？」	音色	・ウッドブロックとトライアングルの音色に着目させる。
○曲に合わせてリズムを打つ。 ・ウッドブロックとトライアングルの音色に着目し、曲に合わせて身体表現をする。	リズム	・部分的に演奏するなどしてそれぞれの楽器のリズムがつかみやすいようにする。
○5年生の演奏を聴き、楽器の音色やリズムを確認する。		・演奏している場面を見せながら、音楽に合わせて演奏するまねをさせる。
○時計の音のリズムをとりながら、全体を通して演奏を聴く。		☆時計の音を表している音色やリズムに気をつけて聴いている。 【発言・活動観察】

「見て・聴いて・交流して」育つ音楽表現

聞き手
野本由紀夫
(玉川大学芸術学部)



大規模校での学年交流授業

野本 2年生と5年生による授業でしたが、6年生でも同じような形態で行っていらっしゃるのですか？

板橋 6年生は4年生と一緒に行いました。学年のクラス数が同じなら1クラスずつですが、6年生と4年生はクラス数が異なるので、6年生1クラスに4年生2クラスと6年生の保護者が参加する形をとりました。器楽合奏に限らず合唱などでも、年間で6年生は2～3回、5年生も1～2回、このような鑑賞会の活動を行って、最後に全員で

今月の歌を歌います。

野本 今月の歌というのは、1年生から6年生まで同じなのですね。

板橋 全学年同じです。学年が違って一緒に歌うことができるように選曲しています。

野本 学年が違っているのに同じ時間に授業を行うというのは、時間割上どうなっているのですか？ちょうど同じ時間になっているのですか？それとも…。

板橋 音楽科の年間計画については4月にお話してありますので、授業の一ヶ月ほど前に担任の先生と相談して

調整しています。

野本 2年生の担任の先生も音楽室に来ていましたが、音楽の評価をされているのですか？

板橋 お願いしています。特に経験の浅い先生には、評価のポイントを示してアドバイスすることがあります。

野本 2年生にとっての鑑賞の意味もありますが、5年生にとっては成果を発表する機会であるということがやはりいいですね。5年生が2年生にそれぞれの楽器の特徴がよくわかる部分を演奏してみせて、自分たちで「楽器紹介」をしたのはすばらしいと思いました。

板橋 そうですね。5年生は急にお兄さん、お姉さんらしくなります。下の学年にわかるように説明しようとしても意欲的になり、こちらから「こう言いなさい」という指示をしなくても、主体的に考えてくれるようになります。

時計から音は出るの？

野本 ある楽器では、曲の中での役割を説明するのに、「カレーライスにたとえば福神漬けのようなものです」など、なかなかおもしろい表現をしていましたね。

板橋 わたしがふだん授業で使っている言葉を、子どもたちが自分たちなりに消化して表現しているようです。今日も曲のどこを演奏するのかというこ

とをわたしと相談はしていません。パートの役割が特徴的なところ、楽器の特徴がよくわかるところを演奏するといよいよ、という言葉はかけましたが、演奏箇所は子どもたちが決めています。それを鑑賞している2年生の様子を判断しながら授業を進めます。5クラスあるとねらいは同じでも流れはそれぞれです。

野本 下級生に伝えようという意識が育っているのですね。学年を越えて、交流の機会があるのはいいですね。A-B-A-C-Aの小ロンド形式といった構成について、子どもたちの中に自然に入っているように思えました。

板橋 今日は楽譜を用意している様子

がなかったのですが、大丈夫かしらと聞いていたのですがよく理解しているようでした。

野本 2年生の子どもたちも、本当によく見ているし聴いていましたね。発言の中には「強弱」についてなど、新しい学習指導要領での〔共通事項〕に含まれているようなものもありました。

板橋 めあてが「ウッドブロック」と「時計の音」に気づいてその音やリズムを楽しむことでしたので、わかりやすかったのだと思います。

野本 最近の時計はデジタルが主流ですが、子どもたちは時計とウッドブロックの音とのイメージが結びつくものなのでしょうか？

板橋 わたしも心配でした。振り子時計や掛け時計が身近にないのでわかるのかな、と思ったのです。このクラスでは“キッコンカッコン”（児童の発言）という音が時計の音、というイメージがあったようです。トライアングルが目覚まし時計を表現しているというところまでやりたかったのですが、時間がなかったので別の機会にすることにしました。

臨機応変さが重要

野本 ところで5年生の楽器の担当はどのようにして決めているのですか？

板橋 希望を取ってから、

どの子にも平等にチャンスがあるよう、じゃんけんを決めています。中学校になると器楽合奏が少ないので、5、6年生のうちにいろいろな楽器を経験して、生涯ずっと音楽とつき合っていくような土台が作れたらいいなと思っています。

野本 ちなみに人気があるのはどの楽器でしょうか？

板橋 マリンバに人気がありますね。わたしが打楽器を演奏するので影響しているのかもしれませんが、アコーディオンでしょうか。アコーディオンは5年生になって初めて演奏するので、やってみたいという憧れもあるようです。6年生にはドラムセットも導入していますが、こちらも人気ですね。中学校で吹奏楽部に入らなければ今しか経験できませんので、なるべくどの楽器もできるといいなと思っています。上手な子が特定の楽器ばかりをするのではなく、どの子にもチャンスがあるように努めています。

野本 ピアノなどは習ったことのない子どもが演奏することもあるのですか？

板橋 まったく経験のない子どもが弾くこともあります。その場合は演奏しやすいようにこちらで易しくアレンジします。また、自分の演奏に余裕のある子どもに、ピアノ・パートのある部分を振り分けることがあります。そうすると技能が上位の児童は満たされずし、周りの子にも優しく教えてあげることができるようになります。できてしまつてつまらない、という雰囲気





●いたばし・のりこ
横浜市立中川小学校教諭

を出す子どもがいるとクラス全体に影響を与えるので、そうした状態を防ぐことにもつながります。技能的に困難な児童への支援は必要です。加えて、技能的に十分達している児童へ更なる支援をすると全体への影響も大きく、より効果的だと思っています。

野本 演奏で得られる満足感は必要ですし、合奏による楽しみが味わえないと達成感は得られないですね。

板橋 満足のいく演奏ができないと子どもたちもつまらなく感じてしまいますし、一生懸命やっている子がいると、周りもがんばろうという気持ちになると思うのです。

野本 (共通事項)にあるような点について「実際に自分たちで気づく」ことも重要ですね。

板橋 短い授業時間の中で、いかに効

率的にねらいを達成し、なおかつ子どもたちを満足させるか。そのために鑑賞の時間に構成を学習しておき、器楽合奏の時間では、わかりやすい部分から始めて、少しずつできる部分を増やすようにしています。「できないところは無理しなくていいよ」と言っています。

野本 先生の仕込みの段階が大変ですね。

板橋 そうですね。パート譜には鑑賞の時間に学習した反復や主旋律・副旋律などについての書き込みを事前におきます。楽譜を渡してからは担当する児童の技能がさまざまなので、さらにアレンジを加えたり余裕のある子に譜面を振り分けたりで臨機応変な対応が必要になります。すると2時間目ぐらいからは、なんとなく主旋律だけでも合わせることができます。わたしはずっと伴奏を弾いていたり、主旋律

を追っていったりすることにより、子どもたちも演奏のタイミングを学んでくれるようです。

音楽はすべてに通じると信じて

野本 中休みに児童が自主練習するために音楽室を開放なさっているとのことですが、そのときは先生も一緒に音楽室にいるのですか？

板橋 はい、必ず付きます。授業とは違うので自由に練習できるようにしています。異学年や違うクラスの子どもが混じるので、同じ楽器でも、「あの子はこんなことをやっているの、教えてください」となります。中休みの練習は異クラス交流にもなっていて、できる子はできる子どもどうしでの刺激になっています。もちろん実演してみせますが、わたしはできて当たり前。でも友達がやっていると、もっとがんばらなくちゃ、と





思うようです。

野本 それはいいですね。

板橋 今の子どもたちは、人とのつながりが薄いように思います。隣で明らかに間違っているのに注意しない。最初はこちらから話す時間をあげないと話しません。音楽を通して、学校教育・道徳教育を実践していくことになると思うのです。担任の先生には、音楽の鑑賞会も球技大会などと同じように学級経営に役立ててくださると伝えています。

野本 こういったことは専科の先生だからこそできることですね。それに、楽器が充実しているという点でも恵まれていますね。5年生は器楽の授業に何時間ほど取っているのですか？

板橋 年間50時間のうち6時間、多いときで7時間ほどです。他に中休みを利用してあります。

野本 あらためて感じるのですが、少ない時間数で楽譜を読ませ、合奏させるのは難しいことですね。

板橋 授業時間が減ったこともあり、器楽合奏などの指導については仲間の

先生たちと情報交換したい気持ちがあります。

野本 新学習指導要領を受け止めてということもあり、最近では「学力」についての話題が多いですね。

板橋 確かにそうです。でも、音楽をがんばっている子どもは他の学力も伸びる場合も多いんです。中休みに希望して練習し、満足している子が

多いクラスは穏やかになったり、勉強もがんばったりする子が多いと聞きます。なにかひとつ学校に満足していること、楽しいと思えることがあれば、他もがんばってみようかな、という気になるものです。

野本 自信がつくのですね。

板橋 はい。学習カードの児童の記入欄には、音楽のことだけではなく「努力すればできるということがわかった」「協力する、心をひとつにするって大切だなとわかった」といった道徳教育につながるものが必ず書かれています。音楽はすべてに通じていると感じています。

野本 まったくそうですね。音楽は感情を育てる右脳を刺激しますし、感性を育てるのにすごく重要ですよ。アンサンブルをすれば、クラスの中で自分が必要とされているという意識も芽生えます。

板橋 だから、音楽の時間は増やすべきだと思うのです。音楽こそ、今の時代の根底に欠けているものだと思います。感性が育てば意欲がわき、意欲が



●のもと・ゆきお

玉川大学芸術学部准教授・音楽評論家

東京藝術大学大学院を修了後、ドイツ学術交流会(DAAD)奨学金によりハンブルク大学博士課程に留学。桐朋学園大学助教授を経て、現在、玉川大学芸術学部メディア・アーツ学科准教授。東京フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会の解説主筆をはじめ、在京オーケストラや海外のオーケストラの来日公演などの楽曲解説も執筆している。著書に『大作曲家リスト』、『ニューグローヴ世界音楽大事典』の「リスト」の項や『ベートーヴェン事典』『はじめてのオーケストラ・スコア』などがある。『日本語デジタル版 メッツラー音楽大事典』(教育芸術社)を監修。NHK-BS『名曲探偵アマテウス』の監修および解説を務めている。

あれば学力が伸びる、と言いたいですね。

野本 努力や協調性、リーダーシップ、コミュニケーション能力などは非常に複合的ですね。異学年交流は総合的な人間教育の場として大変有効ですから、音楽の授業の時間を共有することでそれを実践しているのは、とてもすばらしいことですね。